

# BOOK GUIDE

## 今月のブックガイド

### 「クィア」と「フツー」の境界線？

京都大学の研究者らによる本書は、『フツウの生活プロジェクト』というとりとめのないタイトルに、「クィアでないクィア生活」というわかりにくい副題が付く。ゆるめのキャラクターたちが描かれた装丁はいささかぼんやりとして、その表象自体が、現在の日本社会のある断片を表現しているような気がしないでもない。

本書はコミックとコラムによって構成されていて、コロナ禍によって意識せざるを得なかった「フツウの生活」を改めて考え直し、生活の変化のなかで生じた心のモヤモヤを言葉とイラストで掬い上げようとした試みだという。副題の「クィア」とは、「セクシュアリティに限らず、世の中で多くの人が『フツー』と思っている様々な慣習や暗黙のルールを受け入れることができない、またはそれに対して抗おうとする態度のことを指す。そして、本書で描かれるクィアな登場人物らがそれぞれ「フツー」の生活を送っていることを発信することから、多様な性と生の肯定を始めるのだ、と作者らは宣言する。

多様なアイデンティティとその日常、またそのクィアの内側にもある差異を表現することで、現在という時代を考察するきっかけにしたい、という作者らの目論見が成功しているかどうかは読者に委ねるとして、ここからは本書に触発された私個人の、「フツウの生活」について少々記してみたい。

私には30年以上連れそっている同性のパートナーがいるが、先方の仕事の都合でもう四半世紀以上、海外と日本で別れて暮らしている。ゲイの物書きとして著述業をする傍らゲイバーを経営していて、クィアな人々と接している毎日。また私はとある首都圏の古い集合住宅に住んでいて、かつては、住居人はサラリーマンの父親と専業主婦の妻に子供という核家族がほと



### フツウの生活プロジェクト クィアでないクィア生活

ミツヨ・ワダ・マルシアーノ（作）  
國永 孟（作） 早川宏美（画）  
さいはて社  
定価 1320 円（税込）

んどだったが、今同じ棟に住むのは老人世帯や単身者の高齢者とはとより、ベトナム人や中国人など海外出身の方も少なからず。近所を歩けば、別々に居住しながら買い物へは一緒に手を繋いでいく年配女性の仲良し（カップル？）がいたり、毎日行くスーパーにはトランスジェンダーと思われる大柄な「女性」が元気に働いていた…といった日常の風景のなかに暮らしている。

そして、経営するゲイバーで耳にする話も多様だ。カミングアウトしたら自分の父からゲイであることを逆カミングアウトされたゲイや、息子がカミングアウトしてくれないことに苛立っている母親がいたり…と人生いろいろ。こんなに「放埒」なのは都市部だからなのか？と話をしていたら、地方から来るあるお客さんにこういわれた。「いやあ、田舎のほうがかもっと変化が激しいかもよ。妻の浮気なんて当たり前だし、出奔しちゃう農家のお嫁さんも珍しくない。フツウの家庭なんてあるのかもうわからない、笑」。

本書に「変化はある日突然やってくる訳ではなくて、たいてい気づかないうちにジワジワと浸透していきます」とあるが、「クィア」と「フツー」の境界線ももはやジワジワ揺らいでいる。

そして、これはクィアな日常に生きる私が経験した数年前の出来事。その夏はすごい猛暑で熱中症による救急搬送が社会問題となっていたのだが、私自身、外出中に脱水症状で倒れ、生まれて初めて救急で病院に運ばれることになった。その際、同居している家族がいるかなど個人情報を読まれたのだが、それを担当医に伝える時に看護師が気の毒そうな顔でこういったのだ。「この方、同居の親族もいなくて、身寄りがないんですって…」。

救急医療の場では、私はクィアどころか、ありふれた孤独な高齢者の一人だった、という皮肉！ そう、これぞ「クィアでないクィア生活」そのものではないか、と思うのだ。  
(作家 伏見憲明)